

令和5年度(2023年度)徳島県指定・令和6年度(2024年度)文部科学省指定

小学校人権教育研究発表大会
第54回徳島県小学校人権教育研究大会

研究紀要



令和6年(2024年)11月15日(金)

牟岐町立牟岐小学校

目 次

I	研究の概要	
1	研究主題について	1
	(1) 研究主題	
	(2) 主題設定の理由	
2	研究の方向性	2
	(1) 研究内容について	
	(2) 実施方法	
	(3) 検証・評価・普及	
II	研究の実際	
1	特別支援学級・通級指導教室の取組 . . .	4
2	第1学年の取組	6
3	第2学年の取組	8
4	第3学年の取組	10
5	第4学年の取組	12
6	第5学年の取組	14
7	第6学年の取組	16
8	全校での取組	18
9	家庭・地域との連携	20
10	教職員の研修	21
III	研究の成果と課題	22
1	研究の成果	
2	今後の課題	



【アイヌ文化活動アドバイザー派遣事業】

I 研究の概要

1 研究主題について

(1) 研究主題

<文部科学省指定研究>

「豊かな人権感覚を育成し、多様性を認め合う人権教育の創造」

<徳島県小学校人権教育研究会>

「人権尊重社会の実現を図るため、差別の現実から深く学び、

すべての子どもの自立と自己実現をめざす教育を創造しよう」

～人権尊重の意識を高め、同和問題をはじめ様々な人権問題を解決する

意欲と実践力をもった子どもを育てる～

※研究主題について

○「人権尊重社会の実現を図る」とは

すべての個人が、互いに人権の意義について学び、人権を尊重することの大切さや人権の共存の重要性について、知識とともに人権感覚を身につけ、理性と感性の両面から理解を深め、人権が尊重される社会を築こうとすること。

○「差別の現実から深く学び」とは

身のまわりにある差別や人権問題を正面から見つめ、様々な背景を理解し、それを解決していこうとする取組を進めるとともに、それによって自分たちがどう変わったのかを追求していくこと。

○「自立と自己実現をめざす」とは

他から支配されず、自分で物事を考えて行動するなかで、自己の素質や能力などを発展させ、互いを認め合い、よりよい自己を実現していくこと。

(2) 主題設定の理由

本校は、海部郡のほぼ中央に位置し、海と山に囲まれた全校児童87名の小規模校である。平成25年（2013年）に南海トラフ巨大地震による津波を回避するため、高台（市宇ヶ丘）にある牟岐中学校に併設する形で牟岐保育園・牟岐小学校が建設された。保・小・中一貫教育である市宇ヶ丘学園として、園児・児童・生徒が交流を深めるとともに、学校・保護者・地域・教育委員会が連携し、子どもの学びと育ちを15年間にわたり継続的に指導支援している。

本校は、素直で明るい児童が多く、興味をもって学習に取り組んだり、異学年の児童同士が積極的に関わろうとしたりする姿も見られる。外国籍の児童も在籍しており、宗教や生活文化の違いを身近に感じている。しかし、違いを身近に感じてはいるものの、児童数の少なさから生じる固定的な人間関係に左右されがちである。そのため、違いを認め合うことや他者の痛みや思いを共感的に受け止めること、そして身の回りにある不合理なことや偏見、差別を見抜く力が十分に育っていない児童もいる。新型コロナウイルス感染症対策による行動制限や少子化による身近な人々、地域の人々とのコミュニケーション、仲間づくり等の体験による学ぶ機会の減少が要因の一つとしてあげられる。

新型コロナウイルス感染症は、私たちの生活に大きな影響を与えた。「人権教育の指導方法等の在り方について〔第三次とりまとめ〕補足資料（令和5年3月改訂）」には、「過去に生じた他の感染症による不当な偏見・差別と同様の過ちを繰り返さないようにしなければならない。学校においても、いじめや偏見・差別等を防ぐ取組が必要である。」とある。同

和問題をはじめ身近にある差別の実態に学び、そして人権問題を解決しようとする意欲と実践力の育成に取り組んでいきたい。児童と共に我々教職員も、人権感覚と人権問題を解決する実践力をさらに育成したいと考えている。

牟岐町は少子高齢化が進み、高齢化率が 53%を超えている。持続可能な牟岐のまちづくりに貢献する人材の育成は喫緊の課題である。児童一人一人はこの町を活性化させる貴重な人財である。豊かな人権感覚を育成し、高齢者をはじめ多様な人々となつがり、自分も他の人も大切にできる児童を育成しなければならない。そのためにも、多様性を認め合い、身近に潜む人権侵害を自分ごととしてとらえ、解決に向けて行動していこうとする態度を育てたい。それが児童の自立と自己実現につながると考え、本研究のテーマを設定した。

2 研究の方向性

(1) 研究内容について

令和4年に実施した生活振り返りアンケートでは、「自分のことが好き」と答えた児童の割合は、約50%であった。また、「自分のことを大切にしていますか」の問いに対して思わない児童が10%、「自分と同じように相手のことを大切にしていますか」には5%の児童が思わないと答えている。このことから、本校児童においては自尊感情を高めることが課題であると言える。そこで、自分がしっかり認められ、自尊感情を高めることができれば、友達や周りのことに関心をもち、人権感覚の高まりにつながるのではないかと考えた。

そこで、徳島県「多様性を認め合う人権教育推進協力校事業」の指定を受け、これらの仮説の検証を進めた。また、児童の人権感覚の育成のため、「協力的な学習」「参加的な学習」

「体験的な学習」を取り入れた人権学習に取り組んできた。さらに、個別人権課題の取組の充実も進めてきた。

牟岐町は市宇ヶ丘学園保・小・中一貫教育構想により、タテの一貫（保・小・中の交流）、ヨコの一貫（学校・家庭・地域交流）、ナナメの一貫（学校・地域・町づくり）の教育活動を展開している。ふるさと牟岐町のヒト・モノ・コトからの学びを充実させることにより、多様性を認め合う仲間づくりや、実践力の育成に取り組みたい。また、「人権教育の指導法等の在り方について〔第三次取りまとめ〕」からも、自尊感情の育成と主題とは関係が深いものと言える。このことから「多様性」「人権感覚の育成」「実践力」「自尊感情」をキーワードとして次の研究を推進する。

①自尊感情を高める教育活動

②多様性を認め合う人間関係を育成する人権教育

③豊かな人権感覚を養い、実践力や行動力を育成する人権学習

(2) 実施方法

①自尊感情を高める教育活動

○こむぎっ子班活動等の異学年集団による仲間づくりを進め、コミュニケーション力やリーダーシップを育成する。

○教育活動後の振り返りを重視し、PDCAサイクルによる教育活動の充実を図ることで、児童一人一人の学びの自覚を促す。

○ストレス解消やポジティブ思考への転換等に効果があるとされる「セルフハグ」を取り入れる。

○振り返りを重視し、児童一人一人の学びと変容の自覚を促す教育活動を推進する。

②多様性を認め合う人間関係を育成する人権教育

○市宇ヶ丘学園構想タテの一貫、ヨコの一貫を活用した体験学習、交流学习により、多様性を認め合う人間関係の育成を図る。

○ゲストティーチャーによる「アイヌの文化」「外国籍の人々」との文化やふれあい体験、「高齢者」「障がい者」等とのふれあい体験をすることで多様性を認め合うことの大切さを学ぶ。

○ポジティブな行動支援を取り入れた学校・学級づくりを進めることで、児童一人一人が多様性を認め合う人間関係を構築する。

○市宇ヶ丘学園合同研修（保・小・中による合同研修）による人権教育研修を実施し、教職員の人権感覚の育成と多様性を認め合う仲間づくり等について研修する。

③豊かな人権感覚を養い、実践力を育成する人権学習

○市宇ヶ丘学園構想タテの一貫、ヨコの一貫を活用した人権学習を推進する。

○各学年で重点的に学習する個別人権課題を決めて取り組むことで、授業改善と児童の実践力を育成する。

○「協力的な学習」「参加的な学習」「体験的な学習」による主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を進める。

○教職員自身の人権感覚の育成と授業改善、個別人権課題についての理解を深める教職員研修を実施する。

（３）検証・評価・普及

①児童の授業中の発言や振り返り、ワークシートによる記述、授業後の感想や日記等において、知識的側面や価値的・態度的側面、技能的側面を評価し、授業改善につなげる。

②研究授業後の授業研究会で教職員相互の授業評価を積極的に行い、授業改善につなげる。

③児童や保護者、自己評価によるアンケートを実施し、児童や保護者、教職員の意識等について把握し、成果と課題を明確にすることで教育活動の改善に活用する。

④市宇ヶ丘学園合同研修や３部会（知・徳・体）研修等において保育園と中学校に情報発信し、一貫性のある人権教育の推進に努める。

⑤学校便りや学年通信等を活用し、本校の取組を保護者や地域に発信する。

⑥授業参観やオープンスクール、ホームページを活用し保護者啓発を行う。

Ⅱ 研究の実際

本校がまとめた研究紀要は、今年度末に文部科学省人権教育研究推進事業の報告書の様式に基づいて作成している。「(3) 豊かな人権感覚を養い、実践力を育成する人権学習」については、成果物概要の様式に従い個別人権課題の取組を記載している。

1 特別支援学級・通級指導教室の取組

(1) 自尊感情を高める教育活動

〔特別支援学級〕

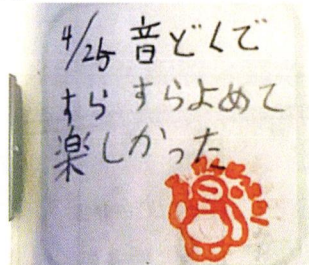
- ・学年始めに特別支援学級児童全員で対面する時間をとった。以前から知っているメンバーではあるが、互いにもっとよく知り仲よくなってもらうことが目的である。上学年児童が進んで活動の準備をしたり下学年児童を気かけたりした。
- ・自立した生活や就労を見据え、挨拶と自分のしなければいけないことが分かり実践できることを目標にしている。一人一人の特性を考慮しながら指導を継続してきた。
- ・1～2週間のペースで、個々に登校時刻やお手伝い等生活面でのめあてを考えて取り組むようにした。めあてが達成できた時は賞賛した。

〔通級指導教室〕

- ・自分でめあてや、頑張りたいことを決め、達成した時や頑張った時に「はなまる」をつけたりシールを貼ったりする「がんばりチェックシート」を作成した。めあてが達成するたびに、もう少し難しいめあてに変えたりレベルアップするためにめあてを増やしたりした。
- ・毎時間、自分の決めためあてをもって学習している。1時間の授業で頑張ったことや難しかったこと等の「振り返り」を話す時間を設けている。書くことで達成感が増す児童もいたため、振り返りシートに書いて振り返りをする児童も多くいた。



【がんばりチェックシート】



【振り返りシート】

(2) 多様性を認め合う人間関係を育成する人権教育

- ・本校では、特別支援教育について様々な形で啓発を行っている。PTA総会で特別支援学級や通級指導教室について説明し、保護者の理解が進むように取り組んでいる。児童に対しては、学年始めに時間を設けて各学級ごとに特別支援学級や通級指導教室はどんなところなのか、どのような学習をしているのか話し、理解を深められるようにしている。

〔特別支援学級〕

- ・週1時間、特別支援学級児童全員が集まり、自立活動（キラキラタイム）を行っている。全員で話し合い意見を出し合っ



【野菜づくり】

て、野菜づくりの計画を立て実践した。水やりや草抜きの作業を分担し、全員が関わる機会をつくり、生命の大切さを体験する場を設けている。

- ・友達と気持ちがうまく通じ合わなかったり困ったりした時には、その都度ソーシャルスキルトレーニングを行い、友達への声のかけ方や自分の気持ちのコントロールの仕方を学習している。その結果、望ましい関わり方ができることが徐々に増えてきた。交流学級の友達への積極的な関わりも増やしていきたい。

〔通級指導教室〕

- ・集中力や聴く力を高める「トレーニング」を、授業の始めに行っている。一例として、ソーシャルスキルトレーニングでは、児童の生活の振り返りをし、教師から助言をしたりと違う考え方もあることを伝えたりと、よりよい人間関係の構築につながるように学習している。

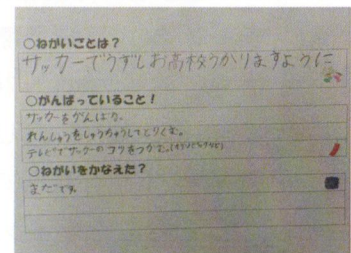


【ソーシャルスキル
トレーニング】

(3) 成果

〔特別支援学級〕

- ・特別支援学級等児童全員で自己紹介や、顔と名前のマッチングゲーム、新聞ボールキャッチボール等を通して仲間づくりを行った。どの活動でも相手を意識しながら楽しむことができた。学習のめあてや七夕の願い事を書くことで自分の目標が可視化され、目標達成を目指し頑張ることができた。学校での指導だけでなく家庭にも協力を依頼することで、互いに連携を図ることができた。コミュニケーションが苦手だった児童が毎日挨拶の練習をした結果、自分から挨拶ができるようになってきた。そのことで褒められ自信がついたのか、他の場面でもできることが増えてきた。



【めあて】

- ・特別支援コーディネーターが一人一人の教育的ニーズに合った学習方法を学んでいること等を全校児童に繰り返し啓発することで、特別支援学級の定義について浸透していった。そのことにより、支援学級児童に積極的に関わる等変容が見られた。また、交流活動や体験活動でも児童の成長をうかがうことができた。個々で取り組む活動や複数で取り組む活動、それぞれの体験から自分でできる喜びを感じたり自分の得意なことを発見したりし、友達とのつながりが深まってきている。

〔通級指導教室〕

- ・めあての達成のためにどうしたらいいのかを教師と一緒に考えるようにしたことで、頑張ろうと前向きに学習に取り組む姿が見られるようになってきた。学習を進めるにあたり、楽しく分かりやすい授業に努め、振り返りで「〇〇ができた！」「〇〇が嬉しかった！」と児童の感想を聞くことが増えてきた。
- ・教師とコミュニケーションをとりながら様々な活動を行うことで、始めは無理だと諦めていた児童も繰り返し取り組むことができるようになった。また、「自分はできるんだ！」という自信や喜びにつながり、より意欲的に前向きに活動や学習に向き合う姿が見られるようになった。

2 第1学年の取組

(1) 自尊感情を高める教育活動

- ・毎日、帰りの会で、一日を振り返り、自分が頑張ったことを思い出してセルフハグをするとともに、互いに拍手を贈り合うことを続けている。
- ・だれでも失敗することはある。うまくいかなかったことを責めるのではなく、励まし合い、次の行動につなげられるように常に互いに声をかけ合うようにしている。失敗することがあっても、「失敗することはいずれにもある」と声をかけ合い、励まし合うことが増えた。
- ・できた結果を褒めるのではなく、頑張っていることを褒めること、上手くいっていない時こそ、その自分を受け入れ、頑張ろうとした自分を認められるようにすることを常に意識して声かけをしたりかかわったりするようにしている。他者のことを考えて行動しようとしたり言葉かけをしたりしていることを捉えて、具体的に褒めたり全体に紹介したりしている。
- ・「ありがとう」の言葉を積極的に伝え、感謝の気持ちを持ち、「ありがとう」の言葉を贈り合い、互いにうれしい気持ちを広げられるようにしている。

(2) 多様性を認め合う人間関係を育成する人権教育

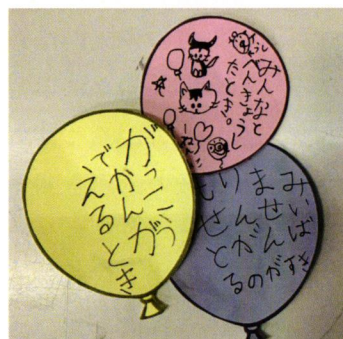
- ・「こころぴかぴか みんなきらきら 1ねんせい」をチーム名（学級目標）とし、共に生活する中で、心を磨き、みんなで、みんながきらきら輝くことができるようにいつも意識して取り組んでいる。
- ・道徳科「ともだちのたね」の学習後には、「みんなこころきらきらがふえてきた」という絵本を作ってきた児童もいた。
- ・「みんなでうれしいをいっぱいに！」を合言葉に、自分の嬉しいことだけではなく、友達が嬉しいことも「よかったね」と声をかけ合い、共に喜び合う等あたたかいつながりをつくっていくことができるように、日々取り組んだ。
- ・毎日、毎時間の授業を大切に、学習する喜びやわかる喜び、共に考えることの楽しさを味わうことができるように、一人一人の認知特性を意識しながら授業を行っている。どの学習にも前向きに意欲をもって取り組み、「しあわせと感じるとき」の学習では「せんせいやみんなといっしょにべんきょうするとき」と書いた児童がいた。
- ・入学当初は、指示を聞き行動することはできていたが、互いに思いやり行動しようとする姿はあまり見られなかった。取組を進めていくにつれ、つながり合い、共に生活することを楽しもうとする態度が育ってきた。



【チーム名（学級目標）】



【うれしい!をいっぱい!】



【しあわせを感じるとき】

(3) 豊かな人権感覚を養い、実践力を育成する人権学習

個人人権課題名	子ども	取り扱った教科等	道徳科	時数	1 時間
ね ら い	・ 自分も周りの人もみんな守られていることを知り、一人で悩まず、困ったことがある時には、助けを求めようとする態度を育てる。				
実施した内容	・ 大切にされていると感じることができるようになるとともに、「かなしいきもちはね、ふたをしなくていいんだよ」ということについて考え、話し合った。 ・ 「一人じゃない」ということや「助けをもとめていい」ということについて考え、話し合った。				
工夫した点	・ 感性や想像力を高める等の取組として続けている絵本の読み聞かせでは、同時期の学習につながる絵本を選書し、読み聞かせた。 ・ 日々の関わりの中で、常に自分や周りのだれもが大切にされていると実感できるように努めた。				
他教科との関連	・ 学級活動『自分も相手も大切にすること』～院内学級の子どもたちが教えてくれた大切なこと～と題して副島賢和氏から「ひとりじゃない」ということを学んだ。 ・ 音楽科や学級活動で、「手のひらを太陽に」や「友だちになるために」を歌い、声や心を合わせる大切さを学んだ。				
成 果	・ 「だれもが守られていること」や「ひとりじゃないこと」を実感するとともに、「どんな感情も大切にしたいこと」や「助けを求めていいこと」がわかり、困った時には、相談しようとする気持ちの高まりが感じられた。 ・ 自分だけのことでなく、周りにも意識を向けたり、互いの思いを聞き合ったりすることができるようになった。 ・ 自分のことを振り返るとともに、相手の気持ちに共感し、自分にできることに取り組もうとすることが増えてきた。 ・ 自分も友達も大切にすることで、みんなが笑顔になることを実感し、みんな笑顔を増やそうとする意欲が高まってきた。				

3 第2学年の取組

(1) 自尊感情を高める教育活動

- ・道徳科で「しあわせのバケツ」という絵本を読み聞かせし、人はそれぞれしあわせのバケツをもっていて、人に思いやりのある行動をすると、自分のバケツも相手のバケツも幸せでいっぱいになるということを学習した。そこから、帰りの会の常時活動として、2年生のしあわせのバケツを作り、友達のよいところを発表すると、バケツにビー玉を入れる活動をしてきた。色とりどりのビー玉がバケツいっぱいになっていくことで、児童もわくわくした気持ちで発表したり、言われた児童も嬉しそうにしていたりあたたかい雰囲気できている。1学期の最後には、クラスの半数以上が発表することができるようになり、結果だけでなく頑張った過程も褒めることができる児童が出てきて【しあわせのバケツ】



- ・児童が安心して学習に臨んだり、生活したりすることができるように、教師から児童の発言をすぐに否定せず、一度受け止めてから話すようにしている。4月当初は、自分の発言に自信がなく声が小さくなってしまう児童や、異なる考えを受け止められずにきつい言葉を発する児童がいた。しかし、堂々とみんなに聞こえる声で発表できてきたり、7月には自分とは違う意見に対して「なるほど」と考えを受け止めることができたりしてきていた。

(2) 多様性を認め合う人間関係を育成する人権教育

- ・生活科で1年生と学校探検を行った。去年自分たちが1年生だったとき、不安やわくわくした気持ちであったことを思い出し、2年生として1年生とどう関わっていきたいかを話し合う機会をもった。「やさしく」だけでなく、具体的に1年生と同じペースで一緒に歩くことや、何をする場所かの説明も正確に伝えることを意識させた。授業の振り返りでは、「教室の使い方をくわしく1年生に教えてあげられて、喜んでもらえて嬉しかったです」「これからも、1年生となかよくあそびたいし、いっぱい教えてあげたいです」と感想に述べる等、自分とは立場が違う人の気持ちになって寄り添うことを学んだ。
- ・生活科「いきものなかよし大きくせん」では、ダンゴムシやオタマジャクシを育てた。生き物の成長・変化を喜び、生命の大切さや生き物を大切にしようとする態度を育て、学級の仲間づくりにつなげたいと考えた。生き物の世話の仕方や観察文をまとめて新聞を作ったり、バッタのために木の枝や草を取ってきたりする児童が増え、命を大切に扱おうとする態度が育ってきた。
- ・学級活動「かみひこうき（ひかり）」の学習では、自分の選んだ色紙を「女いろ」と決めつけられた主人公の気持ちを考えた。男女での決めつけは、人を深く傷付けてしまうということに気付かせるようにした。ワークシートの紙飛行機にそれぞれの好きな色を塗る活動を行い全体で共有した。授業後、人それぞれ違っていいと感想に残したり、強く人に言いすぎてしまう友達に対して、「人それぞれやで」と言う児童が出てくる等、それぞれの違いやよさを認めようとする意欲が高まってきた。



【かみひこうき】

(3) 豊かな人権感覚を養い、実践力を育成する人権学習

個別人権課題名	子ども	取り扱った教科等	学級活動	時数	1 時間
ね ら い	・自分の体も他の人の体も大切にしていこうとする態度を育てる。 ・プライベートゾーンという言葉や、性暴力の加害者・被害者にならないための対処方法を理解させる。				
実施した内容	・文部科学省の教材「生命（いのち）の安全教育」を用いて、「プライベートゾーン」について知った。 ・自分だけの大切なところを見せたり、触らせたりしないこと、また他の人の大切なところを見たり、触ったりしないというルールを確認した。 ・自分の体を触られて嫌な気持ちになる場面を考え、どうしたらいいのか対策を考えた。				
工夫した点	・自分や相手の体を大切にできていない場面を絵を用いて具体的に示し、普段の生活と結びつけて考えられるようにした。 ・自分の体を触られて嫌な気持ちになる場面について、自分ならどうするか具体的に考えるようにした。				
他教科との関連	・体育科「水あそび」で水着に着替える際に、自分の大切なところを見られないようにタオルでかくすことや、他の人の大切なところを見ないようにすることを指導した。				
成 果	・「プライベートゾーン」という言葉や、大切なところを守るルールを理解することができた。 ・自分の体も相手の体も大切にしようとする態度が身に付いた。 ・プール学習で着替える際には、自分の体を見せないようにタオルを使ったり、相手の体を見ないようにしたりする児童が増えた。 ・「もし、人にさわらせてと言われたら断って近くの人に知らせて、にげるということをおぼえておきます」と感想で書く児童もあり、自分の身を守ろうとする態度を育てることができた。				

4 第3学年の取組

(1) 自尊感情を高める教育活動

- ・3年生の児童は、「ことばのキャッチボール」の学習から、自分が言われて嬉しい言葉を自然に友達にも言うことで、互いを高められるあたたかいクラスになることを学んだ。児童が発したあたたかい言葉は、「思いやりの木」として、教室に常時掲示した。1日1回は、言ってもらって嬉しい言葉を使い、シールを貼って意識を高めたり、機会を捉えて、互いが幸せな気持ちを味わえるような場面を紹介したりし、自分に自信をもち、周りの人も大切にしようとする態度につなげていった。
- ・道徳科の「花さき山」で、友達を喜ばせることが自分の喜びになり、自分の花を咲かせることになるということを学習し、自分の中にもある美しい心の花を咲かせるにはどうすればよいかみんなで考えた。そこで、友達を喜ばすことができたことを花のカードに書いて、「牟岐の花さき山」に貼っていき、自分の花のカードが増えていくことを楽しみに、日々生活している。

(2) 多様性を認め合う人間関係を育成する人権教育

- ・総合的な学習の時間は、「大すき！牟岐 ～自分がすき、友だちがすき、牟岐が大すき～」をテーマに学習している。「牟岐のお宝を知ろう」の学習では、茶摘み体験とあんどん作りを行った。茶摘み体験は、地域の方が育てている茶畑で、お茶の葉を「摘む」、「炒る」、「揉む」体験をさせていただいた。あんどん作りは、観光協会の方のお世話で、「あんどんの会」の方に集まっていただき、木枠作りと紙すき体験をさせていただいた。2つの体験を通して、あらためて地域のよさや町の人々のあたたかさを知り、牟岐の魅力を発見することができた。



【茶摘み体験】

- ・2学期になり、3年生のクラスがよりパワーアップするような活動をしようと話し合った。「パワーアップ大作せん！」として、児童がそれぞれ「遊びグループ」「クイズグループ」「ぬり絵グループ」「生き物グループ」をつくり、クラスが楽しくなることや、生き生きと生活できるようなことをグループで相談しながら定期的に活動している。自分の得意なことが、友達を楽しませたり、元気にさせたりすることができるパワーになることで、友達からは「楽しかった」という言葉でお礼の気持ちを受けとり、互いを思いやる姿が見られるようになってきた。
- ・道徳科「ドンマイ！ドンマイ！」の学習では、相手の思いやがんばりを理解することにより、相手を認め、共にがんばろうとする気持ちが生まれること、また、失敗を許す広い心の大切さ等に気付くことができた。この学習を通して、友達のよさや違いに気付き、互いの思いを理解し合うことで、よりよい関係を築き、友達を大切にしようとする態度が育ちつつある。



【あんどん作り】

(3) 豊かな人権感覚を養い、実践力を育成する人権学習

個別人権課題名	障がい者	取り扱った教科等	学級活動	時数	4 時間
ね ら い	互いの違いを認め合い、個性を尊重しながら行動しようとする態度を育てる。				
実施した内容	- 聴覚に障がいのある人について、資料をもとに考えたり、話し合ったりした。(1 時間) - ゲストティーチャーを迎え、手話について学んだ。(1 時間) - 学習を振り返り、障がいのある人とのコミュニケーションの仕方を話し合った。(1 時間) 「病気じゃないんだけどなあ」(ひかり)を用いて、障がいのあるなしにかかわらず、ともに生きがいを感じながら生きていくために、自分に何ができるかを考えた。(1 時間) 【手話体験】				
工夫した点	- 聴覚に障がいがあるとは、どのようなことか、資料からだけでなく、実際に外部の音が聞こえない状態で話し合いをしたり、コミュニケーションの仕方を考えたりした。 - 手話体験は、初めから、聴覚に障がいがある方とやりとりをするのは難しいので、まずは手話通訳の方を介して、やりとりをすることから始めた。 「病気じゃないんだけどなあ」(ひかり)の学習前には、電動車いすが障がいのある人にとって大切なものであることを知らせた。				
他教科との関連	国語科の「わたしと小鳥とすずと」で友達のよさやちがいについて学習した。				
成 果	- 聴覚に障がいのある人との交流を通して、障がいのある人を身近に感じる事ができた。 - 障がいがある外見でわかる人や、そうでない人等、世の中にはいろいろな人がいることについて、知ることができた。 「病気じゃないんだけどなあ」(ひかり)の中の車いすの人に対して、誤った考えを子どもに教える母親の言動について憤りをもつとともに、自分と違った個性をもつ人に対して、互いを認め合うことの大切さに気付かせることができた。				

5 第4学年の取組

(1) 自尊感情を高める教育活動

- ・6月の音楽集会での発表をめざし、4月から音楽の時間に「小さな世界」の合唱と「カップス」の練習に取り組んだ。じょうずに演奏することよりも、友達の音をよく聞いて音の重なりを楽しむことを意識させた。初めはカップスに苦手意識をもっていた児童も楽しみながら取り組むようになってきた。「ちがう曲でもやってみたい」と発言する等、発表が終わっても意欲的に取り組んでいる。【音楽集会「カップス」発表】



- ・発表が苦手な児童の授業中の何気ないつぶやきを取り上げ、学級全体に伝えることを心がけている。「失敗することは恥ずかしいことではない」「大切なのはじょうずにできることではなく、あきらめずに挑戦すること」と伝えていくことで、苦手なことにも前向きに挑戦する姿が見られるようになってきた。音楽や音読の学年発表に向けて早めに練習にとりかかり、全員で発表できたことが、人前に出ることや自分の意見を発表することに苦手意識がある児童の自信につながってきた。
- ・友達の思いをしっかりと受けとめ、一人一人の思いや考え方の違いを認め合える学級にできるよう学級活動の時間に「四つの部屋」の活動に取り組んだ。質問に対して自分の思いに一番近い部屋に入り、自分の思いを伝え合うことで、一人一人感じ方や考え方が違うことを実感することができた。活動後には「みんなちがうからおもしろい」と発言し、互いの思いを伝えたり、受けとめたりすることを大切にしていこうとする意欲が高まってきた。

みんなのほの音をききました。そうなんだ、
と思うこともありました。
りゆうもい、ぼい、きけたし、自分もりゆうい、ぼい、
言ったから自分のこともとしてくれたかな
と思いました。

【児童の振り返りシートより】

(2) 多様性を認め合う人間関係を育成する人権教育

- ・音読集会で「教室はまちがうところだ」を発表した。4月当初は「まちがっているかもしれないけど」と前置きしてから発言する児童が多かったが、この詩を学習してから少しずつ自信をもって発言できる児童が増えてきている。なかなか発言できない友達がいたら「まちがえてもいいんだよ」と声をかけ、励ます姿も見られるようになってきた。
- ・牟岐町民生委員の方に来ていただき、藍畑作り・苗の植え替えを行った。苗の植え方や藍の育て方について学び、育てた藍で藍染めの仕方を教えていただくことを通して、地域の方と交流することができた。
- ・アメリカから来た友達との交流を通して、学校生活や【民生委員の方と交流】習慣の違いを学んだ。知っている英語で表現したりローマ字で書いて伝えたりする等、自分たちなりに工夫してコミュニケーションをとることができた。言葉の壁を越えてつながりを深めようと、積極的に関わろうとする態度が育ってきている。



(3) 豊かな人権感覚を養い、実践力を育成する人権学習

個別人権課題名	インターネット による人権侵害	取り扱った教科等	学級活動	時数	2 時間
ね ら い	・ インターネット上でのコミュニケーションについて考えることを通して、普段の生活でも相手を思いやった発言や行動をしていこうとする態度を育てる。				
実施した内容	・ SNS上のやりとりの例を示し、送られてきたメッセージが適切かどうかを考え、相手を誹謗中傷するような内容が書き込まれたとき、自分ならどのように返信するのか考えた。(1 時間) ・ SNSを使ったグループトークでは、特定の人を本人に分からないように仲間からはずす機能があることを学習し、互いに気持ちよくSNSを使うためにはどうすればよいのか話し合った。(1 時間)				
工夫した点	・ 黒板をスマートフォン等の画面に見立て、ふきだしにメッセージを書いて掲示する等、実際のSNS上のやりとりを想像しやすいようにした。 ・ 自分で考えた後にグループで話し合う時間を設け、全員が意見を伝え合うことで、考えを深められるようにした。				
他教科との関連	・ 道徳科「深く息をすって」の学習でインターネットやオンラインゲームでは、言動が過激になりがちであることについて理解した。				
成 果	・ SNS上のやりとりの具体例を示して授業を展開したことで、SNSを利用した経験がない児童も実際の場面をイメージして考えることができた。 ・ 学習前はSNSを使うときに気を付けることについて「知らない人とはやりとりをしない」という意見が多かったが、学習後には「悪口を書かない」「自分が書いたメッセージは送る前にきちんと確認する」等、顔や名前を明かさずに発信できるSNS上でも相手を意識し、気を付けて使っていこうとする意見が多くなった。 ・ 「ネットいじめ」についての理解が深まった。 ・ スマートフォンやゲーム機を使うときのルールを家の人と決めて、それを守っていこうとする児童が増えた。				

6 第5学年の取組

(1) 自尊感情を高める教育活動

- ・9月に実施された宿泊学習では、友達との共同生活で、直面した様々な問題に友達と協力して解決していく場面が多く見受けられた。このような経験から、児童は、自分で考えて取り組んでみたとき、解決が難しそうであれば周りの友達の力を借りることの大切さを学ぶことができた。学校生活では見ることもない友達の新たな一面を知ることができた児童もいた。そして、大島めぐり、スノーケリング等の感動体験を共有したことで、学級への「所属感」や「連帯感」が深まった。

- ・音読集会の発表で竹内まりやさんの「いのちの歌」の歌詞を音読しながら手話で表現した。詩を読み深めると、家族や身近な人に対する感謝を伝える言葉が、児童の心にとっても響いた様子で、手話も覚えようと意欲的に練習に励んだ。一つ一つの言葉と手話を照らし合わせながら、表現する楽しさも感じる事ができた。これまで何気なく口ずさんできた歌詞も手話で表現することで一層深く味わうことができた。



【音読集会「いのちの歌」発表】

(2) 多様性を認め合う人間関係を育成する人権教育

- ・児童の個性を生かし、学級の一員として、学級をよりよくするための主体的な係活動を「会社活動」とし、5つの会社を作って活動している。「誕生日をお祝いする会社」「かべ新聞会社」「ミュージック会社」等、自分の得意なことや好きなことを生かし積極的な取組を行っている。月に一度は企画会議を行い、意見を出し合いながら、学級のみんなのために活動することが達成感となり、自分の喜びとなっている。
- ・道徳科の時間に「ちがうことばんざい」の学習を行った後、牟岐小学校5年生バージョンの「ちがうことばんざい」の詩をみんなで作った。児童といっしょに様々なあっていい違いを見つけることができた。人には様々な違いがある。だからこそ様々な人とつながりをもち、違いを認め合うことで楽しく豊かに生活することができる。そのことを再確認する意義深い学習になった。
- ・人権学習の個別人権課題に迫る学習では、当事者から直接話を聞く機会をたくさん得ることができた。児童は差別の現実から学ぶことができ、様々な人権問題があることに気付くことにつながった。このような学習から、人権に対する関心が高まり人権感覚が少しずつ身に付いている。



【各会社からの活動生活の掲示】

(3) 豊かな人権感覚を養い、実践力を育成する人権学習

個別人権課題名	高齢者	取り扱った教科等	総合的な学習の時間	時数	3 時間
ね ら い	・ 高齢者の気持ちに寄り添い、自分にできることを考え、行動しようとする態度を育てる。				
実施した内容	・ 高齢者疑似体験装具を身に付け、避難行動を体験することにより、加齢による身体的な変化を知り、高齢者の気持ちに寄り添う。(1 時間) ・ 介助の体験をすることで、介助方法を感じ取り、高齢者とのコミュニケーションの取り方を体験的に学んだ。 【高齢者疑似体験の様子】 ・ 高齢者疑似体験を通して、高齢者の思いや願いに寄り添い、共に生きていく上で、高齢者に対して自分たちにできることを話し合った。(1 時間)				
工夫した点	・ 高齢者疑似体験装具を身に付けて、日常生活の場面での不自由さについて体験させるだけでなく、児童が常に行っている避難訓練と同じ体験をさせ、避難することの大変さを話し合わせた。 ・ 児童と交流のある高齢者の話を聞くことで、高齢者が感じている思いに触れさせ、その後の関わり方や接し方を考えさせた。 ・ 介助の体験をして、介助がいかに大切かということに気付かせ、自分に何ができるかを具体的に考えられるようにした。				
他教科との関連	・ 道徳科『人権が大切にされる町づくり』をめざして」の学習では、様々な人権問題を解決していくために、町の人たちがどのような取組をしているのかについて学んだ。				
成 果	・ 日頃からあいさつを交わしたり何気ない会話をしたりすることが、高齢者の人が児童に求めていることだということが分かり、身近にいる高齢者との関わり方のヒントを得ることができた。 ・ 加齢による心身機能の低下には個人差があり、高齢者とひとくくりにはできないことを理解し、一方的な介助や支援をするのではなく、対話を通じて、相手の立場になって、寄り添っていくことの大切さに気付かせることができた。				

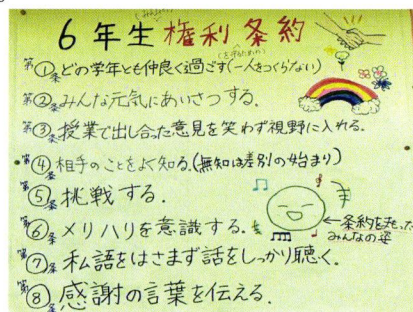
7 第6学年の取組

(1) 自尊感情を高める教育活動

- ・友達と協力したり積極的に行動したりする児童がいた時には、その姿をモデルとして掲示した。その都度、よいところを掲示を参考に話し合うことで学級の雰囲気がよりよいものとなった。定期的に掲示を変えることで、児童のやる気にもつながった。
- ・1年間の取組を「成長年表」という名前で教室に掲示し、児童が自分たちのよさや成長を振り返られるようにした。これまでの生活を可視化することで、次の行事も頑張ろうとみんなで声をかけ合っている。
- ・道徳科「権利ってなんだろう?」(ひかり)の学習では、人権に関する法律や条約があることを学び、自分の権利や相手の権利も大切したいと伝え合った。発展学習として、6年生オリジナルの権利条約をつくり、自分も相手も大切にすることを誓い合った。帰りの会では「ほめ言葉シャワー」として、6年生権利条約でできていることを褒め合い、自分や相手を大切にすることが見られた。



【ほめ言葉シャワー】



【6年生権利条約】

(2) 多様性を認め合う人間関係を育成する人権教育

- ・道徳科「かおりの決心」(ひかり)の学習では、一人一人が相手の立場や気持ちを考えて行動し、支え合う仲間をつくっていくことがいじめをなくすことにつながることを学んだ。学習後の振り返りでは、互いに認め合い協力したいという意見が多くあった。そこで、学びを深める場として牟岐大島でスノーケリング活動を行った。バディにより、互いに助け合い協力することで、仲間づくりへとつなげていくことができた。活動の振り返りでは、「協力することで、海の楽しさをより感じられた」「泳ぐことが苦手だったが、友達の優しい声かけに助けられた」と感想を述べていた。学校生活でも、協力し合って活動する場面が増えている。
- ・「あふれさせたい言葉」と「あふれさせたくない言葉」を教室に掲示した。あふれさせたい言葉を発言している児童を紹介し明るい言葉を増やすことで、誰もが居心地のよいと思えるような教室づくりをしている。
- ・総合的な学習の時間の防災学習では、5年生とグループをつくり、避難所での生活について話し合った。避難所では、幼児、高齢者、外国人等、多様な人がいることを想定し、配慮が必要な人とはどのような立場の人なのかを避難所の運営者になったと想定して話し合った。どのような状況においても互いに認め合い、支え合っていくことが大切であると気付いた。実際に避難することになった時、配慮が必要な人に何ができるかを考えていた。



【海の活動・スノーケリング】

(3) 豊かな人権感覚を養い、実践力を育成する人権学習

個別人権課題名	ハンセン病患者等	取り扱った教科等	社会科	時数	2 時間
ね ら い	・ハンセン病問題を通して、無知が偏見や差別につながることを理解し、差別をなくしていこうとする態度を育てる。				
実施した内容	・徳島県人権教育指導員の方を講師に招き、ハンセン病の歴史と無知が差別を生むことについて学習した。(1 時間) ・誤った隔離政策のため療養所で生活するハンセン病元患者の人々の思いについて考え、自分たちが差別解消の主体者になるためにはどうすればよいか話し合った。(1 時間)				
工夫した点	・ハンセン病について、正しい知識を得られるように、講師の方を招いて話をしてもらった。また、ハンセン病元患者の思いを理解するために、ハンセン病元患者やその家族の人の話をDVDで観た。 ・児童の意見をタブレットに入力することで、それぞれの考えが可視化できた。友達がどのような意見をもっているのか共有しやすくなり、全員が意見を伝え合うことができた。				
他教科との関連	・道徳科「かおりの決心」では、周りに流されず、一人一人が良心に従って、自分の考えをもって行動できるような集団になるためにどのようにすればよいか学習した。				
成 果	・徳島県人権教育指導員の話聞くことで、ハンセン病について正しく理解し、病気に対する無知や偏見が、患者だけでなく、その家族も苦しみ、人権を奪い取られていたことを知った。 ・無知がいじめや差別を生むことを学び、知ろうとしないことや無関心が差別につながっていることに気付いた。「かおりの決心」での、学習を活かすために、こむぎっ子班での活動を通して、友達のことをより知ることを意識づけ、仲間づくりを進めている。振り返りの時間に、友達との関わり方について重点を置いて話すことで、普段関わりの少なかった児童とも積極的に関わるようになった。				

8 全校での取組

(1) 自尊感情を高める教育活動

自尊感情を高めるためには、自分を認めることが大切になってくる。生活振り返りアンケートの結果、自分のよいところに気付かず自分を好きになれない児童や周りの人から大切にされていると感じられていない児童がいた。そこで、自分自身を大切にすることやみんなの中での自分を意識でき、役立っている自分を自覚できる活動に取り組んだ。

①一人一役なんかやり隊

「一人一役なんかやり隊」と称し、児童一人一人が学校のために何ができるか考えて行動し、周りからも認められる機会をつくった。年度初めに高学年児童で話し合いをもち、昨年度の取組の結果をもとに、今年度はどんな活動が必要か考えた。何をするか自分で決めたことで意識して取り組み、他の児童の行動や学校の様子の変化に気付く児童もいた。また、活動に対して「ありがとう」等と声をかけられうれしそうにしている様子も見られた。

②セルフハグ

自分で自分を抱きしめ、温かい言葉、励ましの言葉をかけることで瞬間的に自己肯定感を高める「セルフハグ」を集会や行事等の振り返りとして全校で行った。思うように活動できなかったり発言できなかったりしても「頑張ったね。大丈夫」等と自分自身に語りかけている。自分の頑張りを意識する瞬間にもなっている。また、セルフハグをしている写真を自分へのメッセージとともに掲示している。各学級でもセルフハグの時間を設け、自分を見つめ直す時間をつくっている。



【セルフハグ】

③「しあわせってなに」の取組

音読集会で、「しあわせ」（レイフ・クリスチャンソン文・にもんじまさあき訳・岩崎書店）を紹介し、全校で音読をし、自分の「しあわせ」についても考えて風船型の用紙に書き、掲示した。休み時間等に進んで書きに行く様子が見られた。また、友達と一緒に学習や生活することに幸せを感じるというコメントが見られた。



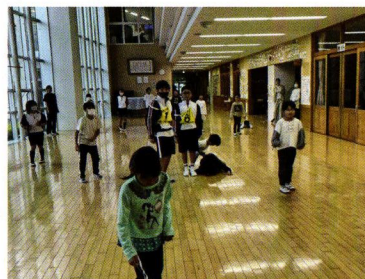
【音読集会】

(2) 多様性を認め合う人間関係を育成する人権教育

交流学习や体験学習により多様な人と触れ合うことで仲間づくりの活動を行うことができた。体験したことを、振り返りの活動を通して「省察」「一般化」「適用」の学習サイクルにより、学びの充実を図っている。

①こむぎっ子遊び

金曜日の朝の活動の時間、1年生から6年生までの異年齢集団（こむぎっ子班）で活動している。以前は教師主導で遊びの種類を決めていたが、6年生が中心となって話し合いをし、遊びの種類や内容を決めることに変更した。児童



【こむぎっ子遊び】

がしたい遊びの内容になり、意欲的に取り組んでいる。高学年児童が、低学年児童を誘って活動を進めることで、他者から憧れられる自分に気付き、自信にもつながっている。

②外遊びの充実

外遊びを充実させ、体力の増進とともに異学年の仲間づくりを充実させる目的で、昼休みの時間を延長した。昼休みが長くなったことで外で遊ぶ児童が増え、高学年が下学年を誘って遊べるようになってきている。異学年で遊ぶことで、互いの思いがすれ違い、小さなトラブルがおこる時もある。しかし、自分たちで解決していく中で、相手の気持ちを察したりすることができるようになり、思いやりの気持ちも育ってきている。

③異校種間の交流

毎年、保小中合同の交流として、学年始めに対面式をしている。中学生が企画運営し、今年は宝探し等をして一緒に楽しんだ。年数回の地震津波避難訓練も一緒に行っている。中学生や高学年の児童が園児の手を引いて避難したり、教職員も協力し合いながら行っている。



【小中合同運動会】

保育園とは、外遊びの時間に年長児が遊びに合流したり5年生児童が業間休みに保育園を訪問したりし、交流を深めている。また、1、2年生は、年長児と生活科のおもちゃランドで交流を図った。



【ランチルーム給食】

中学校とは、ランチルーム給食やごみ0活動、運動会を一緒に行っている。準備や片付け、競技を一緒にしたり、中学生が取り組んでいる様子を見たりすることで数年後の見通しがもて、上級生（中学生）になるとどんなことをしなければならないかを考えるきっかけにもなった。

④ゲストティーチャー

交流学习や体験活動をするためにゲストティーチャーの方に来ていただくことも多く、様々な立場の方と触れ合う機会があった。高齢者の方と一緒に昔の遊びをしたり、聴覚障がい者の方から手話を教わったりした。また、アイヌ文化活動をされている方のお話を聞く等、今まで実際にかかわることのできなかつた方の生の声を聞くことができた。



【ハンセン病についての学習】



【昭和大学■■■■氏による

「自分も相手も大切にするには

どうしたらいいの？」授業】

⑤多国籍給食

毎日児童が楽しみにしている給食に、いろいろな国や地域のメニューを取り入れている。食文化から他の国や地域に関心を持ち、歴史や伝統、民族や文化の違いやそのよさについて知ろうとするようになった。



【世界の料理】

(3) 豊かな人権感覚を養い、実践力を育成する人権学習

各学年、行事や教科学習の中で交流学习や体験活動を行うことで人と人とのつながりをもった。校内だけでなく地域へと交流する場を広げることでタテのつながりやヨコのつながりができ、人権感覚や実践力の育成を見据えた取組を進めることができた。

①交流学习、体験学習

特別支援学級（3くみ）

○今年もよろしくの会

○野菜作り

1年生 ○七夕あんどんの会の方と七夕かざり作り

2年生 ○1年生と学校探検

○昔の遊び体験

3年生 ○茶摘み体験

○あんどん作り体験

4年生 ○藍畑作り

○ビーチコーミング

5年生 ○防災まつり

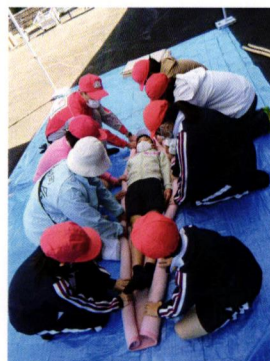
○高齢者疑似体験

6年生 ○避難所フィールドワーク

○牟岐中学校人権意見発表会参加



【七夕かざり作り】



【防災まつり】



【昔の遊び体験】

②人権集会

日常生活の中で直面することの多い身近な人権問題について、異学年集団で話し合った。普段特に気にしていなかった言動の中にも相手を傷付けてしまっていることや人権問題に関わることがあることに気付くきっかけとなった。各学年で振り返りをし、より具体的に自分ごととしてとらえられるようになった。

9 家庭・地域との連携

(1) 参観日・オープンスクールでの取組

人権学習に取り組む様子を保護者に公開し、学校での人権学習の内容を、家庭でも考えてもらうようにしている。オープンスクールは、保護者や地域に公開している。人権に関わる学習や活動も実施している。



【人権授業参観】

(2) 学校だより、学年通信、人権通信等での取組

学校の教育活動等の取組を知らせるために、学校だよりや学年通信等を発行している。その中に日々の生活の中の人権に関する出来事やお知らせ、授業の様子等を取り入れている。人権通信では校内での人権教育の取組の紹介や児童の様子、家庭でも一緒に考えてほしいこと等を知らせている。保健だよりでも、セルフハグ等保健の視点から見た人権に関わる内容を盛り込んでいる。

10 教職員の研修

人権教育を進めるためには、まずは全ての教職員が人権尊重の理念を十分認識し、取り組むことが大切である。様々な人権課題を知り、理解を深め、人権感覚を磨くことで児童への人権教育ができるようになる。児童、学校、地域の実態に応じた適切な教育ができるよう、様々な形で研修を進めてきた。

(1) 全体研修

全ての学級で人権学習の研究授業を行った。講師を招き、指導案検討会や事前研修は低中高学年に分かれて行った。全教職員が授業を参観し、授業研究会も実施した。研究テーマに合わせてKJ法で児童の取り組み方や授業実践の方法等について研修した。また、授業を参観する視点を決め学習活動や



【保小中合同授業研究】

発問、支援や板書等についても研修し、全員が必ず発言するようにした。保育園や中学校の教職員も参加したり、互いに授業を参観し合ったりし、共に学ぶ機会になった。

講師を招き、人権教育での具体的な指導法や様々な視点から取り組む人権教育について話をしていただいた。(一例)

①天満病院小児科 ■■■氏

「障がいて何？」

②昭和大学大学院准教授 ■■■氏

「自分も相手もたいせつにするには

どうしたらいいの？」

～院内学級の子どもたちが教えてくれた

たいせつなこと～

③徳島市人権教育・啓発講師団講師 ■■■氏

「人権教育を通じて育てたい資質・能力」

④国立学校法人 鳴門教育大学大学院 学校教育研究科

特命教授(名誉教授) ■■■氏

「災害後(復旧・復興時)における子どもへの対応」

⑤アイヌ文化活動アドバイザー ■■■氏 ■■■氏

「アイヌの文化・歴史」(講話、切り絵体験)



【■■■氏講演会】

(2) 市宇ヶ丘学園合同研修

牟岐保育園、牟岐小学校、牟岐中学校による合同研修を年間を通して実施している。研究授業を授業研究会、「知・徳・体」の3部会に分かれて15年を見通した牟岐の教育について研修を深めている。人権学習をテーマにして研究授業と授業研究会、講演会等を実施している。



【市宇ヶ丘学園合同研修】

(3) 「徳島型メンター制度」

若手教職員を中心に、学び合い教育力アップをめざして徳島型メンター制度を活用し、研修に取り組んでいる。その中でフィールドワークを行い、地域の隣保館へ出向いて館長さんから隣保事業の歴史や隣保館の役割等について話を聞かせていただいた。

III 研究の成果と課題

1 研究の成果

(1) 自尊感情を高める教育活動

- ・異学年集団での活動でリーダーシップを発揮し、達成感を味わうことで自信につながった。
- ・「セルフハグ」を取り入れ、ありのままの自分を受け入れることで、ポジティブ思考へと考え方が変わってきている。



【保育園児と】

令和5年度行った生活振り返りアンケートで、「自分にはよいところがあると思う」と答えた児童の割合が69%であったのが、令和6年度の調査では81%となった。(①参照) 周りの人から大切にされ、認められているという安心感から自分のよさに気付く児童が増えてきたことが分かる。

- ・「一人一役なんかやり隊」を通して、役に立つ体験や感謝される体験をし、自尊感情を高めることができた。前述のアンケートの結果によると、「学校で自分のよさや努力を認めてくれる人がいる」と答えた児童が74%から90%となった。(②参照) 互いの行動を好意的にとらえ、相手を大切にし、自分も大切にされていることを実感できるようになった成果だと考えられる。

(2) 多様性を認め合う人間関係を育成する人権教育

- ・人権集会や集会活動後の振り返りでは、異学年で話し合いを進めることで多様な意見を取り入れるとともに、学級での話し合い活動にもよい影響を与えている。
- ・牟岐保育園、牟岐中学校との交流学習（タテの一貫教育）を通して異年齢集団での仲間づくりの体験をすることで、身近な人々との人間関係の構築に役立っている。
- ・様々な立場のゲストティーチャーから机上では得られない話を直接聞くことで、人権侵害が身近な問題として感じられるようになった。



【ネット社会の人権侵害】

- ・保・小・中による人権学習研究授業、授業研究会や講演会を実施することで、連続性のある人権教育について再認識することができた。

(3) 豊かな人権感覚を養い、実践力を育成する人権学習

- ・牟岐中学校人権意見発表会やアイヌの歴史・文化学習では、6年生と牟岐中学校生徒との交流学习を実施し、意見交流を行うことで児童の知識の更新につながった。
- ・個別人権課題についての人権学習では、徳島県人権教育指導員や地域の講師と連携し、学習を進めることで児童、教職員の人権感覚の育成につながった。アンケートでは、「人と違っていても自分が正しいと思うことは主張できる」と答えた児童が増えている。(③参照) このことから、児童と教職員の人権感覚が育成されてきていることが分かる。
- ・「協力的な学習」「参加的な学習」「協働的な学習」を取り入れた人権学習に向けて、教職員研修を重ねることで、指導力が向上し授業改善へとつながった。



【アイヌの歴史・文化】

2 今後の課題

(1) 自尊感情を高める教育活動

- ・活動に振り返りが活かしきれていない。体験により学んだことや課題が、改善点や次の目標に見出せるようにPDCAサイクルによる教育活動をさらに推進していく。
- ・全体的に見ると児童の自尊感情は高まってきているが、まだ自尊感情の低い児童が数名見られる。児童一人一人の実態を今一度とらえなおし、タテの一貫、ヨコの一貫を活用した教育活動を強化し、自尊感情の育成に取り組んでいく。



あいさつ運動

(2) 多様性を認め合う人間関係を育成する人権教育

- ・少人数による「固定化された人間関係」の改善には、まだまだ課題が残る。誰に対しても自分の考えや本音を言えない様子が見られる。本音を出し合い互いに考え合って解決する力をつけたい。
- ・アンケート結果によると、「友達を仲間はずしにしたり、つらい気持ちや悲しい気持ちにしたりしたことがある」の問いでは、約40%の児童が「ある」と答えている。(④参照) 互いを認め合う仲間づくり、体験活動を重視した仲間づくりを充実させ、多様性を認め合う人権教育の推進を図っていきたい。
- ・授業参観や学年通信、ホームページ等を活用して、保護者や地域の人々に本校の人権教育についての発信と啓発を行ってきたが十分とは言えない。今後も、あらゆる機会を通じて発信していく必要がある。

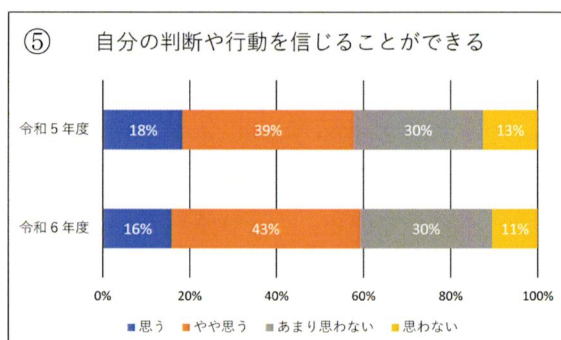
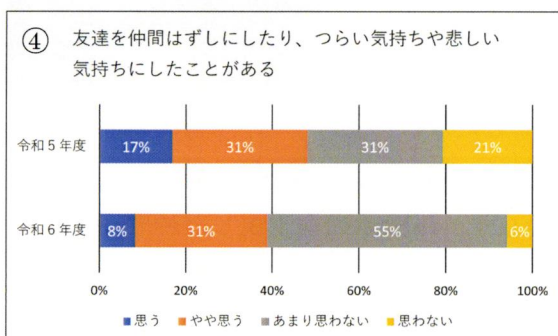
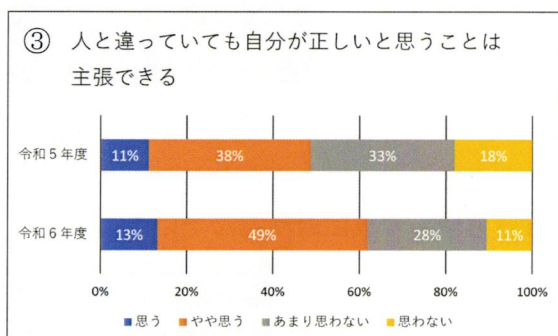
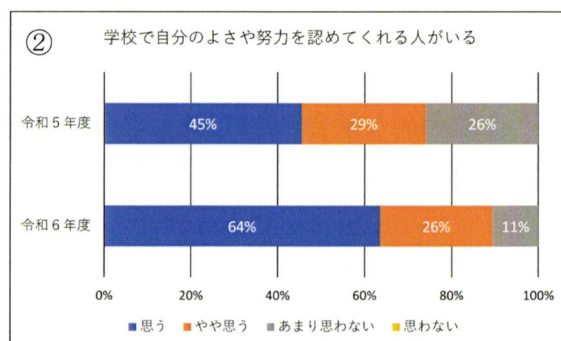
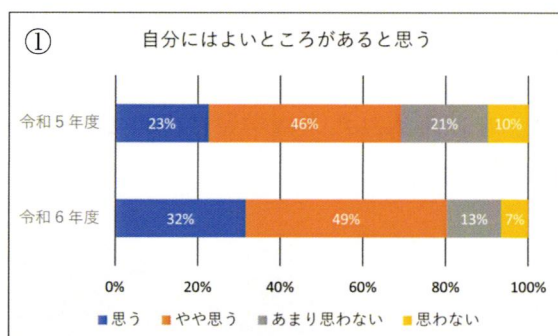


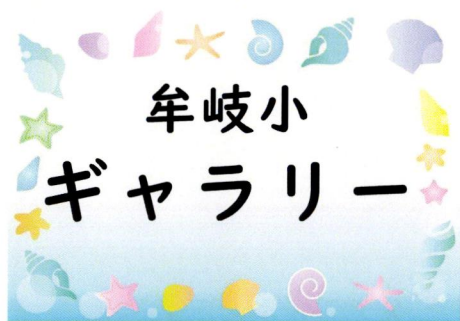
小中合同対面式

(3) 豊かな人権感覚を養い、実践力を育成する人権学習

- ・主体的・対話的で深い学びの実現のためには、体験活動や学習の中で相手の話を聞く力や伝える力をさらに育成する必要性がある。

- ・学年の実態に応じた個別人権課題の取組では、講師や体験活動を取り入れて授業改善につながった。教科横断的な学習として児童の人権感覚と実践力を育成させるためにも、カリキュラムマネジメントが必要となる。
- ・アンケート結果によると「自分の判断や行動を信じることができる」については、変化が見られなかった。(⑤参照) 相手の気持ちを考えた上で何らかの行動をすればよいことは分かっているが、実際に行動に移せていない様子がうかがわれる。人権問題を解決する実践力を育成するためにもタテ、ヨコ、ナナメの一貫教育による人権学習のさらなる研究を進めていく。





【セルフハグ】



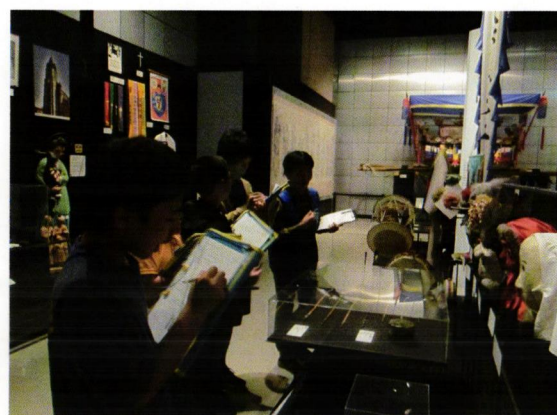
【一人一役なんかやり隊】



【人権標語】



【朝鮮半島文化体験】







牟岐町立
牟岐中学校
MUGI Junior High School





牟岐町立
牟岐小学校
MUGI Elementary School



